

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：54502

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520270

研究課題名(和文)江戸時代日本語語源研究の文化史的意義の解明

研究課題名(英文)A research on Japanese etymology during Tokugawa era

研究代表者

土居 文人(DOI, Fumito)

神戸市立工業高等専門学校・その他部局等・教授

研究者番号：20300600

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 500,000円、(間接経費) 150,000円

研究成果の概要(和文)：日本で最初に出版された和語の語源辞書、松永貞徳『和句解』(1662年刊)の研究及び近世に執筆・出版された語源研究書・語源辞書の研究を行った。『和句解』は、見出し語が近世初期に出版された易林本系の節用集(横本『二躰節用集』のグループに属する節用集)から和語を抄出して立項したものであることを証明した。また、『和句解』の語源説に吉田神道の語源説が影響していることを、清原宣賢 後抄本『日本書紀抄』所載の語源説との比較から証明した。また、『和句解』の「日常用語を含めた和語を網羅的に収集して見出し語として立項し、和文の語釈(語源説)を記す」記述形式が、中世の辞書と歌学書の記述形式の総合であると指摘した。

研究成果の概要(英文)：Modern form of Japanese dictionary began with explanation of etymology. Wakuge is the first published dictionary of Japanese etymology. It was written by MATSUNAGA Teitoku who was a poet of Haikai and also was a scholar of Japanese classics on beginning of Tokugawa era. Entry words of Wakuge were selected from a traditional Japanese dictionary, which has only entry words, but explanation of words. This dictionary is supposed to be a kind of Ekirinbon Setsuyosyu. Etymological explanation of Wakuge was influenced by Japanese etymology of Yosida sinto which was established by Yoshida Kanetomo. The form of Wakuge, which has entry words and explanation of words, is the form of modern Japanese dictionary. This modern form as the Japanese dictionary was synthesis of traditional Japanese dictionary which doesn't have explanation of words and dictionary of poetic terms which has explanation of words, both written during Muromachi era.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：日本語学

キーワード：松永貞徳 易林本節用集 日本書紀抄 吉田神道 寛永文化 語源研究 江戸時代

1. 研究開始当初の背景

日本語語源研究は、研究分野として成り立っていないのが現状であり、今後、体系的な学問になる可能性もあまり期待できない。また、聖アウグスティヌスの著作とされている『弁証術 (De Dialectica)』第6章「語の起源」に記されている通り、「語の由来を考えることは、必要性というよりは好奇心の問題である」場合が多い。

しかし、個別の語について日本語の語源・語誌を考える営為は、日本語研究の一部として継続的に行われている。語源研究は、語の正しい語源を解明することができないとしても、日本の言語文化の一部となっていることは確かである。

近世(安土桃山時代・江戸時代)に、松永貞徳(1571-1653)著の和語の語源辞書『和句解』(1662刊)を始めとして、日本語の語源研究が和学・国学の一環として行われた。この近世の日本語語源研究の当初の状態とその後の展開を追跡して研究することで、日本語語源研究の文化史的意義について、ある程度明らかになると予想された。

近世の語源研究は、新井白石『東雅』(1717成立)については、杉本つとむ氏により、影印・翻刻・解題・索引を備えた『新井白石 東雅』(早稲田大学出版会、1994)が出版されて、信頼できる本文が提供された。しかし、貝原益軒『日本釈名』(1700刊)は、1910年に出版された「益軒全集」の誤りの多いテキストが提供されているのみであり、『和句解』については、影印・翻刻ともに社会に提供されていない状況である。つまり、日本語語源研究史を知るための基本的な環境が整っておらず、このことも、日本語語源研究が進展しない理由の一つとなっていると考えられる。

語源は、国語辞書編纂のために必要な情報の一つであり、少なくとも、日本で最初に出版された和語の総合的語源辞書の『和句解』については、信頼できる本文を提供する必要があると考えられる。

以上が、研究開始当初の背景である。

2. 研究の目的

(1) 近世で最初に編纂された語源辞書であり、日本で最初に出版された和語の語源辞書である松永貞徳『和句解』の成立事情と語源説の性質を調査することにより、その文化史的価値を解明する。また、『和句解』の翻刻を行い、出版することにより社会に語源説資料として提供する。このことは、小学館『日本国語大辞典』(1972-76)の語源説欄に概要のみ簡略化して記された『和句解』の語源説の本文を提供することにもなる。

(2) 江戸時代の語源研究書・語源辞書を網羅的に調査し、そのリストを作成することで、江戸時代の語源研究の流れ・特性及び全体像をより明確にする。

(3) 江戸時代の文学における、語源説の使

われ方を調査することにより、文学の材料としての語源説についての情報を学界に提供する。

3. 研究の方法

(1) 静嘉堂文庫・国立国会図書館・東京大学総合図書館などの所蔵機関に赴き、『和句解』の諸本を調査し、翻刻の底本を決定した。また、近世初期に出版された易林本系の節用集(横本『二躰節用』など)を調査し必要なものについては影印を入手することで、『和句解』の見出し語の依拠資料となった節用集の推定を行った。また、必要な研究資料を購入または京都大学附属図書館などの機関で閲覧調査した。

(2) 国立国会図書館などに赴き、近世成立の語源研究書・語源辞書の原本を調査し、その「江戸時代語源説掲載主要文献一覧」の作成を行った。また、必要な研究資料を購入または京都大学附属図書館などの機関で閲覧調査を行った。

(3) 『断本大系』などの資料を調査し、文学の材料としての語源説について調査を行った。

4. 研究成果

(1)

『和句解』の見出し語が、近世初期に出版された易林本系の節用集から和語を抄出して立項したものであることを明らかにした。この節用集は、横本『二躰節用集』のグループに属する節用集に、易林本または草書本(寿閑本も含まれる可能性がある)節用集から語彙を補足した現存しない節用集である可能性が高いと考えられる。そして、『和句解』の「日常用語を含めた和語を網羅的に収集して見出し語として立項し、和文の語釈(語源説)を記す」記述形式が、中世の辞書と歌学書の記述形式の総合であると考えられる。

また、『和句解』の見出し語の依拠資料となった節用集の同定を試みる過程で、項目の配列の違いや語彙の有無の発見をきっかけとして、近世初期に出版された易林本系の節用集の系統関係について、ある程度明らかになった。

たとえば、寛永九年(1632)刊杉田良庵版縦本『二躰節用集』は、寛永六年(1629)刊横本『二躰節用集』から派生したとみられる。「も」部言辭門「將」の傍訓「もつて」が、寛永六年刊横本『二躰節用集』では「もつ」と誤刻されているが、寛永九年杉田版縦本『二躰節用集』でも同様に「もつ」と誤刻されていることが徴証である。

この「も」部言辭門「將」については、寛永十五年(1638)西村版『真草二行節用集』では、傍訓は「もつ」のまま、楷書体の見出し漢字が「持」に変更されている。このことは、寛永十五年西村版『真草二行節用集』(三巻三冊)が、寛永六年刊横本『二躰節用

集』(三巻三冊)または寛永九年杉田版縦本『二躰節用集』(二巻二冊)から派生した可能性を示している。

どちらに拠った可能性が高いかという問題については、寛永十五年西村版『真草二行節用集』中巻「く」部言辭門末尾に「終」と記してあることが有力な徴証となる。この「終」という文字は、二巻二冊本の節用集の上巻が「く」部で終わって下巻が「や」部から始まることから、「上巻はここで終わりである」ということを示しているものと考えられる。寛永十五年西村版『真草二行節用集』(あるいは、その親本となった節用集)の筆工が、草稿にあった「終」の文字を削除し忘れた結果、この「終」が残ってしまったのであろう。以上のことから、寛永十五年西村版『真草二行節用集』は、二巻二冊本である寛永九年杉田版縦本『二躰節用集』から派生した(あるいは、寛永九年杉田版縦本『二躰節用集』のグループに属する節用集から派生した)可能性が高いと考えられる。

また、他にも、林永喜『假名書』(1707写。東京大学文学部国語研究室蔵)の項目は、易林本系節用集(おそらく、易林本が草書本)から抄出されていることがわかった。

これらの、『和句解』の研究過程で得た近世初期に刊行された易林本系節用集に関する知見は、今後、新たな論文として発表する予定である。

『和句解』の語源説に関しては、吉田神道の語源説(おそらく、吉田兼俱の創作した語源説)が多く取り込まれていることを、清原宣賢 後抄本『日本書紀抄』所載の語源説との比較から明らかにした。後抄本『日本書紀抄』には、「和語ニツイテ、心得カタキ事多シ。和語ノ根源ハ、蘇我ノ家ニテ、焼失セリ。某(兼俱卿)力十代祖兼直奉二後堀河院勅一、重テ和語ヲ撰スル也。雖然、後鳥羽院、隱岐国へ移サレ玉ヒシ時、世ニチラスマシキトテ、取テ御出アリシ也。依之、日本ニ、和語ノ根源、タエテ不知也」(上巻・三七丁裏)と記されていて、吉田兼俱と清原宣賢は、和語の語源の解明は困難と認識していたとみられるが、吉田神道の語源説は、近世に相通説・略音の方法によって語源説が作られるきっかけとなった可能性がある。

歴史学者の熊倉功夫氏によると、「寛永文化の基本的性格は、文化の総合性と啓蒙性」である。『和句解』は、その成立時期と内容から、寛永文化の一産物と位置づけられる。『和句解』における「総合性」とは、「知識の総合(和語の語源説を作る際の、和漢の知識の総合)」「辞書の形式の総合(節用集のイロハ分類された項目と、歌学書の和文による注釈の総合)」と言える。そして、「啓蒙性」については、約1500語に及ぶ日常用語の和語の語源を考えることが、強い啓蒙意識を背景としていると言える。

「商ノあきなひ。あく事なきか。利欲のみちなれば也」(巻四)など『和句解』の語源

説は、研究というよりも言語遊戯であるが、これは、貞徳(あるいは、貞徳と一緒に和語の語源を考えた人たち)の語源を考えるという営為が、俳諧の延長線上にあったからであると考えられる。『和句解』の語源説は、松永貞徳らの近世初期の学者による知的好奇心の産物でもありと考えられる。

また、『和句解』の諸本調査により、再善本が東京大学総合図書館蔵本であることを明確にし、東京大学総合図書館蔵本を底本として翻刻を完成させた。

『和句解』の見出し語について、五十音分類の総索引を作成した。また、小学館『日本国語大辞典』・『時代別国語大辞典 室町時代編』などを参照して、『和句解』の語源説本文で使用されている近世初期の語句などのリストアップを行い、翻刻本文の語句索引を作成した。

『和句解』の語源説で使用されている知識をリストアップし、これらについて注釈の執筆を行った。

なお、これらの『和句解』に関する研究成果は、2014年度中に和泉書院から出版予定(現在、印刷中)の『語源辞書 松永貞徳『和句解』本文と研究』(仮題)に記載した。

(2)江戸時代の語源研究については、『和句解』などに掲載されている近世初期の語源説が、貝原益軒『日本釈名』(1700刊)などを經由して定説化し、近代の『大言海』に影響を残したことを明らかにした。また、「中世・近世の語源説掲載主要文献一覧」の作成を行った。この、「中世・近世の語源説掲載主要文献一覧」については、上記、『語源辞書 松永貞徳『和句解』本文と研究』(仮題)に記載した。

『和句解』の語源説が、『日本釈名』に影響を与えている可能性については、『和句解』語源説の『日本釈名』語源説への影響は、全体にわたってはいるが限定的であることがわかった。『日本釈名』が『和句解』から継承した(あるいは離脱しきれなかった)のは、個々の語源説ではなく、言語遊戯的語源説を記載するアマチュアリズムだったと考えられる。

(3)『嘶本大系』などの資料を調査したが、文学の材料としての語源説について、研究上で価値のある知見は、今回は得られなかった。語源説は座興の言語遊戯であり、文学作品の趣向となること、また、文学作品に特別な意味を与えることはなかったものと推測される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

土居文人、貞徳『和句解』成立考 横本『二躰節用集』及び中世の和学との関係、国語国文、第81巻第12号、京大

学文学部国語学国文学研究室、2012年12月、19-35、査読有。

〔学会発表〕(計1件)

土居文人、語源辞書『和句解』見出し語の依拠資料 易林本系節用集との比較、第103回訓点語学会研究発表会、2011年5月22日、京都大学文学部。

〔図書〕(計1件、印刷中)

土居文人『語源辞書 松永貞徳『和句解』本文と研究』(仮題) 和泉書院、2014年度出版予定、300ページ程度。(現在、印刷中)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

土居 文人 (DOI Fumito)

神戸市立工業高等専門学校・一般科・教授

研究者番号： 20300600